

■ JBC クラシック (JpnI) アラカルト (過去全 16 回の分析)

※第 2 回 (平成 14 年)、第 14 回 (平成 26 年) は盛岡ダ 2,000m、第 5 回 (平成 17 年)、第 9 回 (平成 21 年) は名古屋ダ 1,900m、第 6 回 (平成 18 年)、第 12 回 (平成 24 年)、第 16 回 (平成 28 年) は川崎ダ 2,100m、第 8 回 (平成 20 年) は園田ダ 1,870m、第 10 回 (平成 22 年) は船橋ダ 1,800m、第 13 回 (平成 25 年) は金沢ダ 2,100m で実施

※記録は平成 29 年 10 月 10 日時点

■ 1 番人気馬の 3 着内率は 8 割超

単勝 1 番人気馬は 7 勝、2 着 4 回、3 着 2 回で、勝率 43.8%、連対率 68.8%、3 着内率 81.3% と非常に高い好走率をマークしている。なお、単勝 2 番人気馬は 3 勝、2 着 4 回、3 着 1 回で、3 着内率が 50.0%、単勝 3 番人気馬は 3 勝、2 着 3 回、3 着 5 回で、3 着内率が 68.8% だった。

■ 人気馬が上位を占める年も珍しくない

過去 16 回のうち 13 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を収めている。なお、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツーフイニッシュ決着は 8 回、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は 4 回あった。

■ GI・JpnI 初勝利だった馬は 3 頭だけ

過去 16 回のうち 13 回は、GI・JpnI において 1 着となった経験のある馬が優勝を果たしている。なお、そのうち 11 回の優勝馬は、GI・JpnI において 2 勝以上をマークしていた馬だ。一方、JBC クラシックが GI・JpnI における初勝利だったのは、第 10 回のスマートファルコン、第 12 回のワンダーアキュート、第 16 回のアウオーディーだけだった。

■ 優勝馬の大半は 4~6 歳

馬齢別の勝利数を見ると、3 歳が 1 勝、4 歳が 4 勝、5 歳が 4 勝、6 歳が 4 勝、7 歳が 2 勝、8 歳が 1 勝となっている。幅広い年齢層から優勝馬が出ているもの、4~6 歳の馬が優勢と言えるだろう。

■ JRA 所属馬が創設から 16 連勝中

過去 16 回の優勝馬 16 頭はすべて JRA 所属馬だった。地方所属馬は 2 着が 4 回、3 着が 3 回あるものの、まだ優勝例はない。なお、現在のところ 3 着以内となった地方所属馬は第 10 回のフリオーソ（2 着）が最後である。

■ 牝馬は優勝例なし、外国産馬は昨年が初勝利

現在のところ牝馬の優勝例はなく、2 着となったのも第 2 回のプリエミネンスだけだった。また、外国産馬の優勝例も第 16 回のアウオーディーのみである。

■ アドマイヤドンとヴァーミリアンが“3 連覇”を達成

3 回連続で優勝を果たしたのは、第 2 回、第 3 回、第 4 回のアドマイヤドンと、第 7 回、第 8 回、第 9 回のヴァーミリアン。また、この他に第 3 回と第 4 回のタイムパラドックス、第 10 回と第 11 回のスマートファルコン、第 14 回と第 15 回のコパノリッキーが 2 回連続の優勝を果たした。

■ 騎手別の歴代最多勝記録は「8」

騎手別の勝利数を見ると、8 勝の武豊騎手が断然のトップ。安藤勝己騎手が 2 勝で続いているものの、ほかの現役騎手は現在のところすべて 1 勝以下である。

■ 調教師別の歴代最多勝記録は「5」

調教師別の勝利数を見ると、5 勝の松田博資調教師が単独トップ。3 勝の石坂正調教師が単独 2 位、2 勝の小崎憲調教師、村山明調教師が 3 位タイとなっていた。

■ 勝利数は 8 枠がダントツ

枠番別の勝利数を見ると、5 勝の 8 枠が単独トップ。未勝利の枠番はないが、ほかの枠番はいずれも 2 勝以下だ。また、馬番別の勝利数を見ると、2 勝の 2 番、4 番、9 番、13 番、15 番がトップタイ。未勝利の馬番は 3 番、8 番、11 番、12 番、16 番で、ほかの馬番はすべて 1 勝ずつだった。